週刊新潮より抜粋

異国の美人剣士たち

21世紀のこの世において、武士道の精神を受け継ぐのは、何も日本人だけではない。世界各地で「KENDO」「BUSHIDO」を探求する異国の剣士たちが、5月29日より開催された「第16回世界剣道選手権大会」に集った。白熱の会場から、真剣勝負にのぞむ美しき女剣士たちの姿をお届けしよう。

イギリス ●ジェニー・ナッシュ選手

週刊新潮より抜粋

異国の美人剣士たち

ここは剣道の聖地・日本武道館。1970年以来3年おきに世界各地で開催されてきた世界大会が、45年ぶりに聖地に戻ってきた。

「17カ国が参加した第1回大会から45年。今大会では過去最多の56カ国・地域にまで増えました」（大会関係者）

現在、260万人とされる世界の剣道人口のうち、日本だけで160万人余り。続いて50万～60万人の韓国、1万人のフランスとは、未だに大差がある。今大会も、男女の個人・団体戦とも日本勢が優勝、圧倒的な強さを見せつけた。

しかし、国内の剣道人口は減少から横ばいの苦境にあり、外国勢の存在感は年々増している。韓国、台湾、中国などアジアの近隣国の他、アメリカ、ブラジルなど日系移民から普及した国、ヨーロッパを中心に日本文化への関心が強い国など、伝わり方も地域も様々だが、竹刀を交える姿に国境はない。心身の鍛錬を積んだご覧の美人剣士たちの凛々しさに、思わず背筋が伸びるのだ。

撮影・土居 誉

ドイツ ●リッサ・マインベルク選手

ポーランド ●アガタ・ジョムコフスカ選手

ブラジル ●ララ・タチバナ選手

週刊新潮より抜粋

セルビア ●ティヤナ・チルコヴィッチ選手

フランス ●アリス・ミショー選手

シンガポール ●レイナ・チャン選手

南アフリカ ●カール・ジョベール選手

異国の美人剣士
――世界剣道選手権大会取材に寄せて

大浅（おおあさ）　真梨子（まりこ）

「日本武道館に行ってきてくれ」。編集会議で投げかけられたこの一言により、私は生まれて初めて、剣道の試合会場に足を踏み入れた。今年5月末、日本武道館で開催された「第16回世界剣道選手権大会」（16WKC）でのことである。

拙稿は、「週刊新潮」記者として同大会の取材に伺い、写真ページで「異国の美人剣士たち」と題した記事（平成27年6月11日号）を掲載したいきさつを記すものです。全くの門外漢がこうして誌面をお借りすることは恐縮ですが、日本人でありながら自分にとって今まで縁遠い存在であった「剣道」に、WKCに集った世界各国の選手の姿を通じて触れた感銘を述べさせていただくものとしてお許しいただければと思います。

1970年に第1回大会が行われて以来、45年ぶりとなる日本武道館での開催。大会当日、続々と会場入りする選手団は、アジアから北南米、ヨーロッパ、アフリカに至るまで、実に56カ国・地域に及ぶ。こうしてはるばる聖地・日本武道館にやってきたことへの高揚と緊張が、どの国の選手からも伝わってくるようで、カメラマンと共に会場内に入る私も、おのずと緊張感に包まれた。

今回の取材の目的は、国際化が進む剣道の現状をレポートすること。3年に一度行われるWKCについて耳にしていたのは、年々レベルアップし存在感を増しているという外国勢の戦いぶり、そして男性選手の雄々しさは勿論、特に各国の女性選手の凛々しい美しさが印象的だ、という評判であった。専門的な取材をする知識も資格もない。しかし、遠い異国で剣道と出会い、探求する選手たちに人間としての興味を引かれた。そして、世界各地で彼ら、彼女たちを惹きつける「KENDO」とはどのようなものなのか――。そうしたことを知りたくて足を運んだWKC。そこで感じたのは、一種のカルチャーショックと言ってもいいほどの、新鮮な驚きだった。

例えば、道場に出入りする際の一礼は、剣道界の方々にとっては当然のごとく身についた常識なのだろうが、そうでない者には深く印象に残る所作である。WKCでも、どの国の選手も欠かさず一礼する姿を見て驚いた。単に〝マナー〟として教えられたから礼をしているのではない、心からの謙虚と敬意が、深々と頭を垂れる姿から感じられた。そのほか会場で目にした、控え場所で素振りをしながら剣先を見つめる静かで鋭い表情。勝っても負けても、端然と試合場を辞する礼儀正しい姿。国も文化も違う人々なのに、その佇まいや眼差しには、何か共通した精神が感じられることに驚いた。海外に伝わる剣道とはどのようなものなのか、各国の選手それぞれの姿を撮影しにきた私たちだったが、その思惑はある意味では外れた訳である。ひとたび竹刀を交えれば、国籍も何も関係ないということが感じられた。「剣道」を修める心において相通ずる人々が世界中からこの地に集まっている。それだけで、素朴な感動があった。

そして会場を巡りながら、やはり目を奪われたのは、評判通りの女性剣士の美しさであった。イギリス、ドイツ、フランス、ブラジル、ポーランド、セルビア、南アフリカ、シンガポール……。挙げればきりがないが、各国の選手とも実に凛々しい。鍛錬によって培われた精神が、その佇まいや眼差し、表情に一種独特の美しさを宿しているように思われた。彼女たちの美しさを通じて感じられる「KENDO」の精神を伝えたいと思い、外国人女性選手のポートレートを紹介する特集記事となった次第である。私自身と同様、剣道をよく知らないという読者にも、異国の美人剣士たちの姿を通じて興味を持ってもらえたら、との勝手な願いを込めさせていただいた。

今回のWKCの取材を通じ、実際に剣道の試合を見ることの面白さを実感した。部外者が大会に足を運ぶのはハードルが高いが、今まで剣道のことをよく知らなかった人こそ、深い驚きと感動を感じられるはずだ。世界中に広く剣道が伝わる今の時代だからこそ、日本人として知っておくべき大切なことがあるように思えた。剣道のことをもっと知りたい、と思う人が増えることを願いたい。

昭和62年生まれ。東京都出身。神戸大学文学部卒、新潮社入社。「週刊新潮」編集部記者。

（カット・青木千代子）